穂肥と 病害虫防除で 収量アップ	令和４年 夷隅地域水稲生育情報 第　２　報	令和４年６月２０日 夷隅農業事務所 改良普及課 TEL 0470-82-2213 FAX 0470-82-3975

生育概況

移植直後は低温や深水などの影響で茎数が少ない傾向でした。５月下旬は気温が平年よりも高く推移し、分げつが促進されました。６月に入ると気温が低く、日照時間も少なく推移したため、６月１５日時点で茎数は平年と比べてやや少～少となりました。

幼穂形成期は「ふさこがね」で平年よりも１日遅くなりました。「コシヒカリ」の幼穂形成期は平年よりも５日遅く、「粒すけ」は３日遅くなる見込みです。

表１　夷隅地域での作柄調査ほの平年比生育状況（６月 15 日現在）

品種	調査場所	植付時期	幼穂形成期（平年値※）	測定値（平年比※）			
				葉齢	草丈（cm）	茎数（本/株）	葉色（SPAD）
ふさこがね	大多喜町下大多喜	４月23 日	６月 15 日（６月 14 日）	11.1（並）	51.7（やや短）	29.5（少）	44.0（やや濃）
コシヒカリ	いすみ市松丸	４月23 日	６月 24 日（６月 19 日）	9.4（やや遅）	55.4（やや短）	30.4（やや少）	35.6（やや濃）
粒すけ	いすみ市島	４月19 日	６月 22 日（６月 19 日）	11.3（やや進）	52.0（短）	25.0（少）	42.2（やや淡）

※ 粒すけは調査３年目のため、過去２年分のデータと比較した結果を示しました。

１　穂肥の施用について

安定した収量・品質の確保のために、幼穂を観察して穂肥を施用しましょう。幼穂の確認の仕方は、カッターナイフ等で主茎の根本を縦に割り、図１のように幼穂長を測定します。幼穂長が１㎜以上の幼穂の割合が８０％以上（５分の４以上）となった時が幼穂形成期です。そして、幼穂長が１０㎜の時期が、穂肥の施用時期となります。

品種、土質ごとに穂肥の目安は異なるため、表２、表３から確認しましょう。

表２　穂肥時期、生育量の目安(50 株植えの場合)

品種	穂肥の施用時期	幼穂形成期の生育目標値		
		草丈	株当たり茎数	葉色※
ふさこがね	幼穂形成期から１週間後頃（出穂期１８日前頃）	60～65cm以下	29～33本	5.0
コシヒカリ	幼穂形成期７日後から１５日後（出穂期１８日前から１０日前）	70cm以下	28～36本	3.5～4.0
粒すけ	幼穂形成期から１週間後頃（出穂期１８日前頃）	65cm以下	36～39本	5.0

※　カラースケールの値

表３　穂肥施用量の目安（10ａ当たり）

品種	壌土	粘土
ふさこがね	窒素３kg+加里３kg	窒素２～３kg+加里３kg
コシヒカリ		窒素２kg+加里３kg
粒すけ		

※　表２の生育目標値やほ場の地力を踏まえて施肥量を調節しましょう。
※　施肥量の調節等でお問合せください。

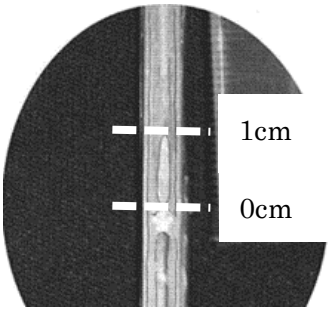

図１　幼穂の確認の仕方

２　水管理について

中干し後は間断かんがいを行い、出穂３週間前から出穂２週間後までは湛水管理とします。また、冷害危険期となる幼穂形成期１０～１５日後に日平均気温２０℃以下が予想されるときは、幼穂を保温するため「深水管理」とします。

３　倒伏軽減剤について

「コシヒカリ」は「ふさこがね」や「粒すけ」と比べ、稈長が長いため倒伏しやすく、倒伏すると、収穫が困難になったり、収量・品質の低下を招きます。肥料持ちがよく、毎年倒伏に困っている水田では、表４を参考に対策しましょう。

表４　主な倒伏軽減剤

薬剤名	使用量／10ａ	使用時期	使用方法	本剤の使用回数
ロミカ粒剤	2～3kg	出穂25～10日前まで	湛水散布	1回
スマレクト粒剤	2～3kg	出穂7～20日前	湛水散布	1回

４　病害虫対策について

（１）いもち病

昨年、いもち病が多発し、伝染源となる稲わら等の罹病残さが多いと考えられるため、**今年もいもち病に注意してください**。一部の地域では既にいもち病が確認されています。出穂２５～３５日前以降に形成されたいもち病斑が穂いもちの主な伝染源となります。表５を参考に防除しましょう。

表５　いもち病に登録のある主な農薬

薬剤名	使用量／10ａ	使用時期	使用方法	本剤の使用回数
フジワンモンカット粒剤	3～4kg	出穂30～10日前 (但し、収穫30日前まで)	湛水散布	2回以内
ラテラ粉剤DL	3～4kg	収穫14日前まで	散布	3回以内
ルーチン粒剤	1kg	収穫30日前まで	湛水散布	2回以内

（２）斑点米カメムシ類

近年、カメムシの多発により、斑点米の被害が増えています。出穂期の一斉防除だけで防除しきれなかった場合は、**出穂後２週間程度の乳熟期頃に追加防除**することで、被害を減らせます。また、**畦畔除草は出穂期前後２週間は行わないようにしましょう**。除草することで、カメムシが畦畔から圃場内に移動し、斑点米の増加につながるためです。表６を参考に防除しましょう。

表６　カメムシ類に登録のある主な農薬

薬剤名	使用量・希釈倍数 (散布液量)	使用時期	使用方法	本剤の使用回数
スタークル豆つぶ	250g	収穫７日前まで	散布	3回以内
トレボン粉剤DL	3～4kg	収穫７日前まで	散布	3回以内
キラップフロアブル	1,000～2,000倍 (60～200L)	収穫14日前まで	散布	2回以内

農薬を使用する際はラベルをよく読み、適正に使用にしましょう。

できるだけ迅速に情報提供を行うため、郵送から電子メールまたは FAX への切替えをおすすめします。切換え可能な方は、下記までご連絡ください。

連絡先　板倉、緑川、高祖、鈴木 ﾒｰﾙ：t.itkr14@pref.chiba.lg.jp TEL：0470-82-2213